

そして彼女の《フランス巡り》はこの努力の一端を物語っている。彼女が理想を納得させ、實現するために努めた實踐は確に特筆に値する。

この實際行動はたとえ彼女の思想が忘れられても人々の脳裏から離れないであろう。フロラ・トリスタンによつて設立された幾つかの労働組合はその後どうなつたであろう。またそれらの組合は二月革命に際してどのような役割を果たしたかあるいはフロラ・トリスタンは二月革命にいかなる影響をおよぼしたか。史料の不足は私のこのような問に答えてはくれない。しかし《労働組合論》は二萬部出版された。この部数は彼女の思想普及のための努力の成果として注目しに値する。またフロラ・トリスタンの盛大な葬儀は民衆の運命の改善に生涯を捧げた彼女の死にふさわしい。そして、いろいろな職業の労働者達の贖金によつて建てられた彼女の記念碑の除幕式が六月の血の事件の後、十月二十二日に行われたということ、およびこの時の模様はフロラ・トリスタンの播いた種が芽生えていたことを教えてはいないだろうか。除幕式の日には、一五〇〇人の労働者たちがまず Quinconces の廣場に集まつて Chartreuse の墓地へ向つた。肅然と沈黙し、脱帽した人たちは黒の紗をつけた三角旗の後に續いた。その旗には《Association, droit du travail》と書かれた文字が見られた。列の人数は次第に増し、Chartreuseに着いた時に七・八〇〇人にもなつていた。そしてフロラ・トリスタンを稱える言葉が多くの人から捧げられたが、その中の一人 Vigier (桶屋)

は「然り吾等は團結せん」という句に始まる自作の詩を朗読した。

Où, nous nous unirons! pour qu'à
notre milice Chacun de nous apporte
un cœur noble et vaillant, Pour que
l'on nous accorde, au nom de la justice,
Le droit de vivre en travaillant.

(Puech, *op. cit.*, P. 290)

Bordeaux の新しい墓の上に建てられた記念碑の柱を取りまく chêne の花飾りは労働者階

級の力の象徴である。白大理石の板が柱の台石にはめられてあり、次のような碑銘が金文字で刻まれている。

A LA MEMOIRE
DE MADAME FLORA TRISTAN
Auteur de l'Union Ouvrière
Les Travaillleurs reconnaissants

LIBERTE—EGALITE—FRATERNITE
SOLIDARITE

諏訪郡川岸村のマキと兩墓制

中 島 文 子

天龍川は諏訪湖の落口、釜口から流れ始める。川岸村はその釜口から約六百米の地點から七軒にわたる山峽の村である。戸數千五百三十七、人口七千七百八十三(昭和二十五年國勢調査)

で天龍川の西岸に三澤部落、新倉部落、東岸に橋原部落、鮎澤部落、駒澤部落が並ぶ。この調査の對象としたのは、鮎澤、駒澤、橋原、新倉、の諸部落である。ただ新倉には丸山、塩坪、澤、夏明の小字があるので調査もそれらの小字を對象とした。

一 マキの名稱と構成

この村の人達はマキは本家からワカレになつ

た家、あるいは同一の祖先からわかれた家の結合であり、同族、一家中、一門、一族のことであるとしてい

る。本家をフルヤ、ソーケ、分家をシンタク、シヤ、アラヤと呼ぶ。マキはハエツキの人達で構成され非本籍の人は含まれない。一つのマキに屬する家々は通例同一の姓をなのつており、その姓をもつてマキの名稱としている例が多い。新倉部落の藤澤、田中、中島、小松、山崎、清水、辰野、西村、橋原部落の高林、林の各マキがそれである。それに對して駒澤部落の立花、九曜、鷹の葉など、各マキの名稱は本家の紋所に由來している。また鮎澤部落の天狗、荒神、八幡、飯綱、權現の各マキの名稱は祝殿の祭神



新倉部落小字澤

の名をとつたものである。
多くのマキは獨立してその機能をはたしているが、なかには大小二重の組織をもつて機能を分化しているマキもある。新倉部落の小字澤では、今ではその戸数も多くなつて判然としなが、自分達は同一の祖先をもつものであるという漠然とした認識があつて構成されているマキと、マツリを中心として構成されているマキがある。前者の場合、澤の山崎姓三十余軒と、それに同じく新倉部落の小字塩坪の山崎姓も二十余軒が加えられて同一マキである。この五十余軒は鬼澤に石碑墓地を松葉に埋葬墓地を共有

している。また若宮の久保に若宮八幡宮を共有し八月十五日夜にマツリがある。この五十余軒がマキマツリを中心とする場合五つにわかれる。この五つが寛文年間の宗門帳によつて系統だてられる。次にかかせる表はそれをしめすもので、下に記した戸数は昭和二十八年現在。

助 藏—絶家

久兵衛—この系三軒

茂右衛門—絶家

彦右衛門—庄三郎 この系四軒

権四郎 この系二軒

彦右衛門—絶家
彦右衛門 この系二十三軒

佐左衛門—絶家

半兵衛 この系十四五軒

作右衛門 この系九軒

久兵衛、庄三郎、権四郎、彦右門の系は澤、半兵衛、作右衛門の系は塩坪に住んでいる。明治末頃まで久兵衛、庄三郎、権四郎の系は一團となつてマキマツリをしていたがその頃から久兵衛の系二軒と庄三郎の系四軒、それに新たしく山崎姓をのつた他系九軒、計十五軒が一團となつて津島神社のマツリをするようになった。彦右衛門の系二十三軒は、鎮神社をマツている。権四郎の系は二軒別に昔ながらのマキマツリをしている。塩坪の半兵衛、作右衛門の系もそれぞれマキマツリをしている。これらの五つのマキを各々祝殿マキといつている。また駒澤部落の鷹の葉、立花、九曜の各マキは大マキといひ、さらにそれらは祝殿マツリを中心とした小

マキにわかれていたが現在その戸数も判然としない。ただ九曜マキの内には子の神という小マキがあつて共有山を持つていたことや、そのような名稱さへ残つていなくても小マキという言葉をきくことがある。駒澤の鎮守の境内には数多くの朽ちた祝殿の祠が散在している。

二 血筋とつきあい

以前には、マキは祖先を異にする他のマキとの縁組やツキアイをきらつた。鮎澤部落の荒神マキは祝殿マツリに際して、絶家が多くて形をくづしうになつた他のマキから加入を申込まれたが祖先がちがうからとことわつた。新倉部落の小字夏明には中島マキが二つあり、その一つは部落の西方に住み、共同風呂を使用している。この西に住んでいる中島マキの中に、東の中島マキから分家してきている家が一軒ある。

この家は共同風呂を使用しないで自家用の風呂であつた。それが最近共同風呂の役員がクミのマツリのために加入してほしいといつてきてから、この家も共同風呂を使用するようになった。マキが地域的に分割された組の性格をおびてきて、その組の整理上加入したものと思われる。山崎政彦氏の調べたところによると元祿、寶永、正徳年代新倉部落では、婚姻はマキの中の者同志に限られ、享保時代より漸く他との婚姻もなされるようになった。

マキでは本家を中心にしてつきあうことはあまりない。新倉部落で分家した當初、取入れ時に本家に手傳にゆくということを聞いただけ

で、マキウチ同等のつきあいをしているのが普通である。つきあいを義理といっているところもある。大きな普請のある場合、赤飯をふかし、持つてゆく。正月にはおたがいに挨拶に行つたり来たりする。葬式には出棺までその家について野の見送りをしたり、家事の手傳いをする。一戸から二人づつで紙細工を受持つたり、近親者にアカシにゆく、その他穴掘り、棺かつぎ、料理の手傳いもマキのものの仕事であつた。婚禮の時荷物を運んだり料理の手傳いをする。屋根葺の手傳いをするときもある。ハネ親が本家とか、近い分家から選ばれることもある。また婚禮をすませた新郎新婦が三日目にマキの一戸一戸をまわつて歩く。今ではこのようなつきあいはおたがいにゆききをしている。

三 祝殿まつり

イワイジン、ユワイジンはマキを守護する神である。祝殿には祖先をまつつてマキもあるが、多くは種類の神を勧請している。祝殿はマキ全体で共有したり、一戸あるいは数戸で所有したりしている。鮎澤部落や新倉部落の小字夏明では各マキの祝殿を合社してしまつた。夏明ではそれを夏明神社として四月四日にまつている。鮎澤部落では祝殿は合社したが、祝殿マツリは各マキ毎におこなつてゐる。新倉部落小字山崎のマキは祝神を屋敷神とよび、宗家の屋敷のうちにまつり、祝殿マツリの時は分家一同宗家に集つてゐた。最近屋敷内に祠をおいて

はおそれ多いというので、山や森林に遷して共有とした。今ではどの祝殿もマキ共有である。祝殿は石祠で、山麓の林の中や、大きな木の下

祝殿

部落名	所有マキ	関係戸数	祭神	祠の所在	神体
橋原小字志平	高林マキ	一二	稻荷	本家の屋敷内	不明
同	林マキA	四	稻荷	中	不明
同	林マキB	二	稻荷	中	不明
同	荒神マキ	一七	荒神	墓上方	不明
鮎澤	天狗マキ	一一	天狗	山麓木下	幣束
同	飯綱マキ	不明	飯綱	同	同
同	權現マキ	不明	權現	同	同
同	八幡マキ	二〇	八幡	同	同
新倉小字塩坪	辰野マキ	一三	祖	山麓林中	同
新倉小字澤	堀川マキ	二〇	大峯権現	山麓森中	ナシ
同	山崎マキA	二三	鎮神社	同	幣束
同	山崎マキB	一五	津島	同	同
新倉小字丸山	西村マキ	一九	祖	同	同
同	三澤マキ	六三	イワイジン	十五社境内祝殿屋敷	幣束
新倉小字夏明	小松マキ	二	稲荷	山麓祝殿屋敷	幣束

祝殿マツリはユワイデンマツリ、ユエーデンマツリ、マキマツリという。まつりはヤドでおこなわれる。マキの中で古いものからヤドを受持ち、シンタクが二軒以上できた場合はくじできめる。鮎澤部落、新倉部落小字澤のマキでは、まつりが終つてから次のヤドになる家をつくじできめる。ヤドに當つた家は、その一年間マキマツリに用いるのぼり、ちようちん、ヒロブタを管理する。鮎澤部落では、マツリは十一月二十三日であるが、十八日にはモトヅクリとい

つて一戸から女の人一人づつで、マツリに飲む甘酒をつくる。マツリの日には橋原部落の高林マキでは、動けるものは全部あつまらなければならぬ。そうきびしくないとされる。マツリにはみんなあつまるのがよいとされる。祝殿に参拝した後、前日に供えた供物をゴクウとして、ひとしく分配される。供物にはいろいろあるが、どの祝殿マツリにも共通しているものは米でつくつたものである。鏡餅、赤飯、甘酒、酒で、それらはかならずヤドで調理され

にある。その祠のあるところを祝殿屋敷といつてゐる。

る。その他季節の魚、野菜、果實などは各自もちよつたり、マキの費用で買う。鮎澤部落では、マツリの次の晩「入費勘定」といつて一戸から一名が出席してマツリの始末をして後また一献する。マツリは、マキ共有の山や田畑の収入、基本金の貸付利息、寄附、ヤドの負擔、あるいは個個の割當てによつて賄う。これらのうち一つの方法をとつてマキも、いくつかを併用しているマキもある。次に積立金の契約書の一例をしめす。これは中島マキの所有するものである。

契約書

今般祝殿祭典執行ニ付氏子社中協議ノ上左ノ通り一個金一圓宛ノ積金ヲ致シ之ヲ社中ニ貸與シテ其ノ利子ヲモツテ祭典ヲ執行ヒ依テ將來保存ノタメ各捺印左ノ如シ。積立金貸附方ハ祝殿社中一統ノ入札ヲモツテ高札ハ貸附クルコト。

明治三十一年舊二月四日

マキで共有山を持つてゐるのが二三ある。澤の山崎マキは耐久保に三反歩程の山を持つており、松の木があつて、毎年松茸や、下木を入札で賣つてゐる。この山の収入は八幡マツリにつかうので、この山を八幡山とよんでいる。駒澤部落の子の神マキも共有山を持つており、祝殿マツリの折にはシタバラとして、その費用にあてたのである。新倉部落小字丸山の西村マキは、カツラのタナに共有山を持つていて、やはりマツリの費用にあててゐる。ここはマツリの木を伐る時以外、はいつてはいけない。新倉部落小字塩坪の辰野マキでは、二丁五反歩の土地

を持つており、鮎澤マキも祝殿の合社される以前、それぞれの祝殿が共有の田畑を持つてい

て、共にマツリの費用としていた。

祝殿まつり

部落名	所有マキ	祭日	供物	宿	費用	呼名
橋原 小字志平	高林マキ	二・三	餅、のぼり、酒	古い家から番	頭割と寄附	
同	林マキA	二・三	餅、酒、あづき	同	頭割と米を一升もちよる	
同	林マキB	二・三	同	同	同	
鮎澤	荒神マキ	二・三	洗米、おからこ酒、ちようちん	鐵	基本金の利息	オイウエーゼン
同	天狗マキ	二・三	同	同	不動産畑	同
同	飯綱マキ	二・三	同	同	同	同
同	権現マキ	二・三	同	同	同	同
同	八幡マキ	二・三	同	古い家から番	祝殿田、その他は宿の負擔	同
新倉 小字塩坪	辰野マキ	二・八	餅、酒、煮物	同	戸別割	イワイ殿まつり
新倉 小字澤	堀川マキ	二・六	赤飯、煮物、ごもく、にく	古い家から番	基金の利息	
同	山崎マキA	二・一	鏡餅、小豆、酒、畑のもの	鐵	寄附、現在是人頭割	
同	山崎マキB	二・三	餅、酒、その他各自重詰持参	同	祭田、現在是人頭割	
新倉 小字丸山	西村マキ	舊三・二	赤飯	古い家から番	祝殿の土地	
同	三澤マキ	四・三	野菜、果實、魚類	古い家から番	人頭割	コンニャクリク
新倉 小字夏明	小松マキ	舊二・四	おひからけ	同	宿の負擔	
新倉 小字夏明	中島マキA	舊三・五	酒、鮎	同	積立金貸付	

この村の祝殿マツリは春と秋、主として二月、三月、四月、十一月、十二月に行われる。人人がこれからセワシクなり、あるいはラツクリできる月である。二月を中心にした祝殿マツリは二月八日のコトハジメと八十八夜の田の神マツリとの間におこなわれ、十一月、十二月のマツリは、十月十日のカカシマツリすなわちトイカンヤと、十二月八日のコトオサメとの間にあたる。

四 墓 地

川岸村では、丸山の三澤マキの人達が禪宗、慈蓮寺の壇家である以外は全部、眞言宗、昌福寺の壇家である。墓地は、山の神上墓地(橋原部落小字志平)、蛇の洞墓地(新倉部落小字塩坪)、森の下墓地(新倉部落小字夏明)、経塚墓地(同上)、昆沙門裏墓地(同上)、的場墓地(鮎澤部落)、洞山墓地(駒澤部落)、南原墓地(同上)、内林墓地(同上)、北垣外墓地(同上)、喜和多墓地(同上)、丸山墓地(新倉部落小字丸山)、松葉墓地(新倉部落小字澤)、久根際墓地(橋原部落)、高道墓地(三澤部落)がある。山の神上墓地は高林マキと林マキ、蛇の洞墓地は清水マキ、辰野マキ、山崎マキ、森下墓地は中島マキ、経塚墓地は藤澤マキ、昆沙門裏墓地は田中マキと小松マキ、的場墓地は鮎澤の四マキ、金原マキ、丸山墓地は三澤の五マキ、西村マキ、松落墓地は山崎マキ、堀川マキが共有している。同一墓地を二つ以上のマキで共有している場合、墓地内をおののマキが分割している。埋葬地はマキの内ならどこ

を掘り返してもよく、すぐ隣接していても他のマキの地域には埋葬しないことが多い。鮎澤部落、新倉部落の小字塩坪、澤では、人口の増加に伴って埋葬地を新しく設け、どこかのマキの人達も自由に空いている場所を選んで埋葬しているが、石塔場の方は相變らずマキごとに分割している。石塔場は奥から古い家の順にならんで、分家したものは、入口に近く石塔をたててくる。人口の増加と土地の狹隘に伴って、分家をして石塔をたてる場所がなくなってきたので、兄弟が共同して、「先祖代々之墓」、「某家同族の墓」のラントウをたてるようになった。その人たちの子孫は戒名を書いた銅板をそのラントウの中に入れてゆくのである。

五 川岸村の兩墓制

墓地の多くは山麓にある。前述の墓地のうち、鮎澤部落、新倉部落小字澤、塩坪の墓地はその形態を異にしている。すなわち他の墓地は、埋葬地と石塔場は同一の場所にあるが、この三つの墓地はその間十米乃至五十米のひらきがある。鮎澤部落の的場墓地、新倉部落小字塩坪の蛇の洞墓地は、その距離が比較的近接しているため、墓地は一つの名稱をもつてよんでいるが、新倉部落小字澤の墓地は二つの名稱があつて、埋葬地と石塔場を區別している。高臺にある松葉墓地は五十坪ほどで、堀川、山崎兩マキの共同埋葬地である。そこには石塔をたてず、埋葬した上にマクラ石をのせる。澤の人達はこ

を、「墓地」といい、五十米程下つて石塔のたつている地域を「鬼澤の石塔場」とよんでいる。石塔場は、山崎マキと堀川のマキで分割し、堀川マキの石塔場より二十米ほど登つて山崎マキの石塔場がある。石塔場はそれぞれ二十坪ほどでその中に石塔がぎつしりたつている。山崎マキの石塔場は四基、堀川マキの方は九基の五輪塔が新しい石塔の奥にたつてゐる。朽ちて文字が判明しにくいのが、寶曆、明和、安永からのものが多い。なおこの石塔場の下方に林があつて、その地域が五ヶ所に分割されそれぞれ五基乃至十基の石塔がある。その一ヶ所は堀川、四ヶ所は山崎の文字をきざんだ石塔がある。それらの石塔の前の土地は固つてゐるが、點々とマクラ石がみえる。石塔の年代は元祿のものもある。この林の下に六地藏と廻り場がある。廻り場は十坪程で、高さ一間程の石の板を二枚たてた棺桶置場がある。葬式のとき、かついできた棺桶をこの上にのせて、會衆がその周圍を左に三回廻る。六地藏と廻り場はどの墓地にもある。それから推して、澤の墓地はこの林の中のものが古く、ここが狹隘になつたため、石塔を、「鬼澤の石塔場」にたて、埋葬は松葉墓地におこなわれるようになったと思われる。川岸村の墓地の多くは前にも述べたが、その地域がほぼ二分され、一方には石塔をたて、もう一方は埋葬を専らにしている。埋葬地の方は早く忘れた方がよいといわれていたが、今は埋葬された上に置かれるマクラ石の記憶を辿つて、石塔場の方と共に詣でている。墓地がせまいので、埋葬場の方は常に掘り返される。石塔

もその間を人がやつと通行できる間隔にぎつしりとたてられてゆく。鮎澤部落の的場墓地も、新倉部落小字塩坪の蛇の洞墓地も、これが嵩じて、近くに埋葬場を設けるようになったものと

思う。埋葬場が新設されても、石塔は以前の墓地で、かつての埋葬場の方に進出してたてられる。

金江津村周辺のビシャ

福田万里子

統合されているけれども、字の獨立性は強く、特に神祭りに顯著である⁽³⁾。これから述べるビシャも、神祭りの一種であり、部落あるいは組單位に行われている。この村に残存するビシャに就いて、大字ごとに述べる。

(1) 十三間戸

正月二十日 水神ビシャ
九月十一日 稻荷ビシャ

ここには年二回のビシャがある。ビシャ仲間は四組に分れ、組ごとに當番となる。今年の當番組の内の二人を本當相當といい、來年の當番組の内の二人を下當^{した}という。當日、本當の家にビシャ仲間全員が集り、神前で三献の後、下當が御幣をかついで座を立つ。このとき玉蜀黍のふくらましたものを撒く。女子供がそれを拾い合う。組の者全部で下當を家まで送つて行く。

(2) 平川

正月二十日 水神ビシャ
九月十五日 稻荷ビシャ

ビシャ仲間は十一組に分れている。水神ビシャの方が重んじられている。水神ビシャ當日、水神社・熊野神社・愛宕神社の三つの社の扉が開かれる。かつては三日間行つたが、今は十九・廿日の二日間である。

十九日をカイホカイという。準備くらいでさしたる行事はない。

二十日、十一の各組では、輪番制の當番の家に集まり遊山講⁽⁴⁾をする。これとは別に、午後二時ごろ區長・區長代理・小使本當(平川に三人)の六人が水神社よりオニッキ(お日記函に収めてある綴本の様なもので、一枚に三軒づつ、平川の住民の家號が記されている)を戴き、本當の家で開く。次の頁に記されている三軒が相當、つまり受取方となる。オニッキは一枚以上めくつてはならない。受取方と謠を入れて、十人で式が始まる。受取方八献、渡方七献、二汁五菜に折詰の料理である。受取方は酒だけ飲み、オニッキ御幣をかついで歸る。本當は、五年に一ぺん廻つて来る(稻荷ビシャは、廿七年ごとに廻つて来る)。四時ごろ渡方で準備した送り馬、受取方で用意した迎え馬が、水神社を七時半、各組の當番の家を一回廻つて歩く。この送り馬迎え馬は、おのおの白木綿一反で飾り、御幣をつける。一匹の馬に若衆三人子供十人から二十人つく。子供たちは白地の袴の袴絆に襷がけで素跣である。各家でおひねりを貰い、大根の端を賽の目に割つたものに、油墨をつけ道行く人につけて歩く。

夜、女年寄たちがハナミをやる。座もとの旦那

金江津村は茨城縣稻敷郡の最南部、下利根川に沿つた、東西に細長い村である。十三間戸・平川・金江津・下加納・片巻・田川の六つの大字から成つており、人口五一〇五人、戸數九〇三戸(昭和廿八年八月現在⁽¹⁾)という農村である。全村土地が低く、助崎新田⁽²⁾下加納新田の名の残つている事からも、比較的新しい開發新田村である事が察せられる。明治七年、村の中央にある側高神社(延寶七年の創設⁽³⁾と言ひ傳えている)を村社と定め、字の祭日の統一は相當強く叫ばれたらしいが、村人のウブスナ(村字の神社をウブスナといい、屋敷の西北に祀つてある屋敷神をウジガミと呼んでいる)に對する信仰は簡單に變えられず、字ごとに異つたウブスナを祀り、異つた寺院の檀家となつてゐる。行政的には